

京都市京セラ美術館 2026 年度 展覧会情報

特別展「生誕 140 年記念 染織家 山鹿清華—宙翔ぶイマジネーション—」

主催：京都市、産経新聞社、読売テレビ

2026 年 9 月 19 日（土）～12 月 20 日（日）

本館 南回廊 1F

染織芸術のパイオニア山鹿清華。

40 年ぶりの回顧展を京都市京セラ美術館で開催！

デザインから素材の選択、制作までを作家が一貫して行う「手織錦」という染織美術作品を生み出し、祇園祭のタペストリー、建築家・村野藤吾との協働による空間装飾など、京都が生んだ知られざる作家の軌跡を代表作と資料で辿ります。

京都で活版印刷業を営む家に生まれた山鹿清華（やまがせいか／1885～1981）は、十代の頃に西陣織の図案と日本画を学び始めました。やがて神坂雪佳に師事し、創作の幅を広げていきます。図案、糸の選択、織りの工程をひとりで行うつづれ織「手織錦」を自ら考案したことで勢いをつけると、1927 年、新設されたばかりの帝展・美術工芸部門に《手織錦和蘭陀船》ておりにしきおらんだせんを出品し、特選を受賞しました。

祭礼時の懸想品などには天女や雲龍といった伝統的な図柄を、官展や日展への出品作の壁掛などには機関車、ロケット、東京タワーといったユニークなモチーフを用いたように、山鹿の主題選びは実に多様で奇抜です。彼は明治、大正、昭和にわたり染織の伝統継承に努める一方で、進取の気風にも富んだ稀有な存在だったといえるでしょう。本展は山鹿清華の仕事を振り返る、40 年ぶりの回顧展です。

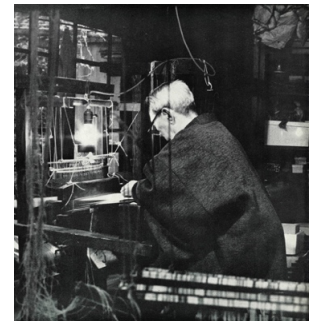
作家略歴

山鹿清華 | Yamaga Seika (1885-1981)

明治から大正、昭和と長きにわたって活躍した染織作家である。京都市内で最古の活版印刷所を営む両親のもとに第七子として誕生し、1900 年、15 歳のときに西陣の図案家に師事。作家としての歩みを始める。また、1910 年には敬慕していた図案家・神坂雪佳に師事することが叶い、雪佳が主宰する佳都美会に入会し、図案、日本画、織物などを発表。1927 年、42 歳になった山鹿は、美術工芸部門が新設された帝展に出品した《手織錦和蘭陀船》が特選を受賞し、染織作家として立つことを決意。作家自らの一貫制作によって生み出される「手織錦」でもって染織美術というジャンルを打ち出し、帝展や日展への出品をはじめ、祭礼装飾、奉納懸想品、緞帳などを幅広く制作した。ホテルや豪華客船の室内装飾も手がけ、工芸の発展と後進の育成にも尽力し、1969 年文化功労者に選ばれた。



《手織錦星座・月・ロケット》1938 年、京都市美術館



<巡回情報>

会期：2027 年 2 月 20 日（土）～4 月 11 日（日）

会場：東京ステーションギャラリー（お問い合わせ：東京ステーションギャラリー TEL. 03-3212-2485）

主催：東京ステーションギャラリー（公益財団法人東日本鉄道文化財団）、産経新聞社

特別展「思考する彫刻家 ラファエル・ザルカと堀内正和 —幾何学とモダニティをめぐる対話（仮称）」

主催：京都市、ソニー・ミュージックエンタテインメント、毎日新聞社ほか

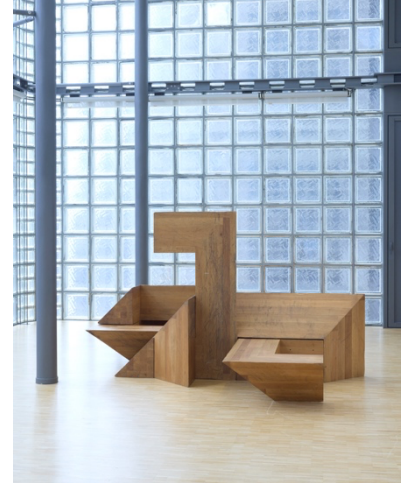
協力：ヴィラ九条山、アンスティチュ・フランセ、ベタンクールシュエーラー財団

2027 年 2 月 6 日（土）～5 月 5 日（水・祝）

新館 東山キューブ

本展は、日本における抽象彫刻のパイオニアである堀内正和（1911-2001）と、パリを拠点に幾何学形態を探求するラファエル・ザルカ（1977- ）の創作の深奥に迫り、「思考する彫刻家」という共通項から、国や時代を超えた二人の知的営為を読み解きます。

展示では、完成した形だけでなく、スケッチ、ノート、模型といった貴重な資料を公開し、いかにして幾何学的な形態が論理的思考から導かれるのか、その生成プロセスを模型や資料を通じて可視化します。さらに、多作な文筆家である両者の活動にも着目し、形を追求する行為と、言葉で思考を構築する行為との「思考の二重奏」を提示します。最大のみどころは、モダニティの新たな位相を示す、堀内作品のリサーチを経たザルカの新作群です。これは、二人の精神的な対話の結実であり、現代彫刻におけるモダニティの新たな地平を切り拓く意欲的な試みです。知的刺激に満ちた本展は、彫刻の本質と、芸術における思考の役割を問い直します。



《Paving Space Regular Score W8M1》2016 年
銀座メゾンエルメスフォーラム「つかの間の停泊者」展 展示風景
Courtesy the artist and galerie Mitterrand, Paris
Photo : Nacása & Partners Inc. /
Fondation d'entreprise Hermès
© Raphaël Zarka / ADAGP, 2026

本展のみどころ

1. 思考のプロセスを可視化する：模型とロジックから生まれる幾何学造形

本展の核となるのは、国も時代も超えて二人の作家が共有する「形を決定づける思考のプロセス」です。スケッチ、ノート、そして模型などの貴重な習作を公開し、いかにして幾何学的な形態が生まれるのか、紙と論理的思考から導き出されたのか、そのプロセスを掘り下げて展示します。

2. 彫刻家であり、文筆家でもある：形と言葉による「思考の二重奏」

両者は単なる彫刻家であるだけでなく、多作な文筆家でもあります。本展では、日本語とフランス語で書かれた二人の著作やノートを対比させ、言葉とヴィジュアルを通して彼らの知的営為を提示します。なぜ、形を志向する彫刻家が、同時に言葉で思考を構築する必要があったのか。その根源的な問いに迫ります。

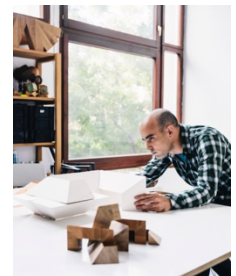
3. 時空を超えた対話の結実：ザルカが堀内作品を通して思考する“モダニティ”

堀内作品の造形原理と日本美術における並行遠近法に強い関心を持つザルカが、そのリサーチの成果として展開する新作群です。時代と国境を超えた二人の精神的な「対話」が、どのように現代彫刻の新たな地平を切り拓くのか。その刺激的な結実を目の当たりにすることができます。

作家略歴

ラファエル・ザルカ | Raphaël Zarka (1977-)

フランスに生まれる。パリ国立高等美術学校卒業。20 世紀の幾何学的抽象を継承しつつ、科学やテクノロジーにおける幾何学的应用を研究し、彫刻、写真、映像、出版など多岐にわたる媒体で発表。特に「動き」への関心から、スケートボードが可能な *Cycloïde Piazza*（サイクロイド・ピアッツァ）（2024 年、ポンピドゥー・センター）等の実用的彫刻を展開する。また、空間とスケートボードをめぐるエッセイを執筆する文筆家でもあり、現在は数学的単位「ラジアン」に関連する研究で博士号取得を目指している。



Raphaël Zarka 2015

Photo : Maxime Verret © ADAGP, Paris -

堀内正和 | Horiuti Masakazu (1911-2001)

京都に生まれる。日本における抽象彫刻の先駆。1950 年代より、数学的な思考に基づき、空間や面の構成を論理的に追求した純粋な幾何学造形を展開。その創作は緻密な思考プロセスを辿るものであり、数多くの精緻な紙彫刻や模型、ノートを残した。また、多作な文筆家としても知られ、独自の造形思考を綴った著作を多数刊行。京都市立芸術大学教授を務めるなど後進の育成にも尽力し、日本の戦後モダニズム彫刻の発展に決定的な足跡を印した。



「第 119 回日展京都展」

主催：第 119 回日展京都展実行委員会（京都市ほか）

2026 年 12 月 19 日（土）～2027 年 1 月 16 日（土）

本館 北回廊 1・2F、南回廊 2F、光の広間

日本最大規模の総合公募展「日展」の京都展を開催します。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の 5 部門にわたって、全国を巡回する基本作品と京都・滋賀の作家による地元関係作品の計約 500 点をご覧ください。



2026 年度コレクションルーム

当館のコレクションは、近代以降の京都の美術（日本画、洋画、彫刻、版画、工芸、書）を中心に現在約 4,400 点を数えます。明治期から昭和期の京都画壇の近代日本画・洋画などには全国有数の名品が揃っているほか、近年は世界の巨匠版画を集めた ZERO コレクション、また平面表現における現代美術の変遷を 30 年にわたって捉えてきた VOCA 展の受賞作など多数の作品を新たに収蔵しています。コレクションルームでは、竹内栖鳳、上村松園など京都を代表する人気の名作紹介に加え、テーマ特集展示を通じて、京都を基軸とした近代から現代の美術の面白さをたっぷりと体感していただきます。

観覧料 一般 ※1 京都市内在住の方：520 円/京都市外在住の方：730 円、小中高生等 京都市内在住の方：無料 ※2/京都市外在住の方：300 円、小学生未満 無料

（※1 京都市在住の 70 歳以上の方（身分証明書をご提示ください）、障害者手帳等を提示の方およびその介護者 1 名は無料です。京都市キャンパス文化パートナーズ制度に登録している京都の大学に通学する学生の観覧料は 100 円です。 ※2 京都市在住または通学の小学生・中学生・高校生・高等専門学校生）

春期 特集「没後 20 年 井田照一」

2026 年 3 月 20 日（金・祝）～6 月 21 日（日） | 本館 南回廊 1F

井田照一（1941-2006）は、版画という表現形式の可能性を根底から問い直した、日本を代表する版画家・現代美術家です。京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）美術専攻科修了後、パリやニューヨークでの経験を経て、京都を拠点に国際的な活動を展開しました。紙や布、陶など異素材を用い、「Surface is the Between／表面は間（あいだ）である」という理念のもと、物質とイメージ、内と外が交錯する表面を関係性の生成する場として捉え直しました。2026 年の没後 20 年にあたる本展では、井田の版画作品に加え、「表面＝あいだ」の思考を立体へと拡張した作品、さらに版を媒介に実験的な実践を行った作家の作品群も紹介します。



左：井田照一《Surface is the Between-Between Vertical and Horizontal - "The Between No.12-Floor, Paper and Wood"》1977 年 京都市美術館蔵
右：井田照一《天使のキャンペーン》1969 年 京都市美術館蔵

夏期 特集「詩情の画家、塩川文麟と近代京都の日本画」

2026 年 6 月 26 日（金）～9 月 6 日（日） | 本館 南回廊 1F

幕末から明治にかけて京都を中心に活躍した画家、^{しおかわぶんりん}塩川文麟（1808-1877）。雨に煙り、霞のかかる山間や穏やかな光のあたる水辺など、湿潤な風景を描くことを得意としました。柔らかな筆致による温和な画風は京都画壇に大きな影響を与え、後進画家にとっては憧れの対象となりました。

また、文麟は画家団体「^{じょうんしゃ}如雲社」でも中心的な役割を果たしました。如雲社は四条派、円山派、原派、鈴木派など京都を代表する流派の画家が集う場で、文麟は画家たちのリーダーとしても尊敬を集めていたのです。

本特集では、近代京都画壇の重鎮である塩川文麟の作品を紹介します。また、文麟と同時代の画家や、後の世代の画家の作品もあわせて展示することで、文麟を中心とした近代京都日本画の展開をあらためて振り返ります。



左：塩川文麟《四季耕作図・蚕業図（部分）》1860 年頃 京都市美術館蔵 右：塩川文麟《桃林山水図》1863 年 京都市美術館蔵

秋期 特集「美術館物語 市美の産声」

2026 年 10 月 9 日（金）～12 月 13 日（日） | 本館 北回廊 1F

京都市美術館は 1933（昭和 8）年、日本で最初期の公立美術館「大礼記念京都美術館」として開館しました。館の設立に当たっては京都の財界、政界、学界など多くの市民の尽力、出資がなされ、全国に類を見ないほど大規模な、美術の殿堂が完成します。京都の美術界も大きな期待を込めて全面的に協力し、竹内栖鳳、菊池契月、鹿子木孟郎、（五代）清水六兵衛など重鎮たちが評議員となり、美術館のあるべき姿を議論しました。

そして、開館翌年には館による大規模企画として「大礼記念京都美術館展」が開催されました。画壇の垣根を越え、全国の様々な団体が一堂に出品した画期的な展覧会となり、会期後には展覧会組織と美術館によって優れた出品作が購入されました。こうした、開館時期に収蔵された作品が京都市美術館のコレクションの嚆矢となり、華々しい美術館のスタートを飾りました。

本展示では、京都市美術館の出発点に注目し、大礼記念京都美術館の設立にまつわる歴史と、初期に集められたコレクションの様相について、作品と資料を紹介することで振り返ります。



左：大礼記念京都美術館竣工時の写真 1933 年 右：徳岡神泉《麦》1934 年 京都市美術館蔵

冬期 特集「時を塗る－京都のうるしが映した近代」

2027 年 1 月 15 日（金）～3 月 14 日（日） | 本館 南回廊 1F

平安時代より、時を越えて受け継がれてきた京漆器。本特集では、近代から戦後における京都の漆芸の歩みを辿ります。明治から大正期にかけて、京都の漆芸は江戸期以来の伝統的な技術や意匠を継承する一方で、西洋的な意匠を受容したり、琳派など近代以前の日本美術への回帰が見られるようになります。昭和初期には、近代的な生活様式に調和するモダンな漆器が登場し、伝統と現代性が融合した独自の美が追求されました。さらに戦後には、従来の漆芸の枠を超えた新たな表現が模索され、他素材との融合や実用を離れた斬新な造形が追求される中で、京都の漆芸は大きな変革を迎えます。

近代における京都の漆芸では、古来の伝統とともに時代の感性に応じた創意が重ねられてきました。本展では、伝統と革新が交わる中で生まれた京都の漆のさまざまな姿を紐解きます。



左：神坂雪佳《漆画人物祭礼之図飾箱》大正期 京都市美術館蔵 右：奥村霞城《漆器鹿の図パネル》1937 年 京都市美術館蔵

ザ・トライアングル

美術館のリニューアルを機に新設されたスペース「ザ・トライアングル」（北西エントランス地下 1 階・観覧料無料）。新進作家の育成・支援の機会を創出するとともに、市民や観光客など来館者が気軽に現代美術に触れる場を提供しています。これまでに累計 21 人の京都ゆかりの新進作家を紹介してきました(2026 年 2 月現在)。2026 年度は引き続き下記 3 名のアーティストを紹介します。なお本事業には、「新進作家支援・育成事業等のためのチャリティ・オークション&ガラ・ディナー」を通じたご支援をいただいております。

倉敷安耶（くらしきあーや）2026 年 5 月 30 日（土）～8 月 30 日（日）

倉敷安耶は、作品を通して自己と他者や共同体との関係を探求しています。宗教を主題とした名画に、ウェブ上の画像や自身が撮影した写真を組み合わせたコラージュを制作。それをキャンバスに転写し、信仰やケアの行為として位置づけた作品にします。また平面作品とは別にインスタレーションや儀式的なパフォーマンスを展開することもあります。本展では、美術館の所蔵作品をモチーフに新作を制作します。京都の美術という大きな流れのなかで語られてきた作品に、自身の身体的経験や感覚を重ねることで、個人の記憶と歴史のあいだに新たな関係を構築します。転写によって写し取られるのは図像だけでなく、時間やまなざしの蓄積であり、本展はそうした重なりを通じて他者や歴史との関わりを考える場となるでしょう。



倉敷安耶《九相図》2023 年 撮影：花戸麻衣

1993 年兵庫県生まれ。2018 年、京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）大学院芸術研究科油画専攻修了。2020 年、東京藝術大学大学院絵画専攻修了。現在、東京と関西を拠点に活動。近年の主な個展に「祖母は屋敷にひとりで住んでいた。」（LAG/東京/2025）、「おまえの骨が軋むとき」（ARTDYNE/東京/2025）、主なグループ展に「群馬青年ビエンナーレ」（群馬県立近代美術館/群馬/2025）、「ニューミュレーション#5 倉敷安耶・西村涼『もののうつり』」（京都芸術センター/京都/2023）など。

松延総司（まつのべそうし）2026 年 9 月 12 日（土）～12 月 20 日（日）

松延総司は、インスタレーションや立体、ドローイングなどを通して、線、影、無意識、地（背景）といった、掴みどころのない事物を扱う美術家です。これまで、壁紙、輪ゴム、落書きといった日常的なモチーフを素材に、それらがつくられるプロセスや機能、関係性に着目し、鑑賞者の知覚を揺さぶる作品を発表してきました。その実践は、造形手法そのものを問い直し、作ること・見ること・在ることの前提を再考させるものです。本展では、松延の一貫した取り組みを紹介するとともに、鑑賞者が自身の知覚や認識のあり方にあらためて向き合う契機となるでしょう。



松延総司《私の石》2025 年
撮影：Kohei Omachi

1988 年熊本県生まれ。京都嵯峨芸術大学短期大学美術学科ミクストメディア領域卒業後、2023 年にポーラ美術振興財団在外研修員としてフランスに滞在。現在は滋賀を拠点に制作活動を行なっている。近年の主な展覧会に、「家具と抽出し」（A-lab、兵庫、2024 年）、「Woven、Knot」（gallery chosun、ソウル、2024 年）、「not a house」（MBL Architectes、パリ、2024 年）、「Soft Territory かかわりのあわい」（滋賀県立美術館、2021 年）など。

藤野裕美子（ふじのゆみこ）2027 年 1 月 15 日（金）～4 月 18 日（日）

藤野裕美子は、日本画の素材や技法を基盤としつつ、絵画を立体空間へと拡張する表現を探究する作家です。作品を壁面から自立させ、そのあいだに生まれる「隙間」を介して、鑑賞者の動きや展示空間の光、さらには気配までも取り込みます。各地の空き家という、かつて人々が暮らした生活の痕跡をとどめる場所へのリサーチを出発点とし、画面には積み重ねられた時間を想起させる要素が織り込まれ、異なる時間の層や人々の記憶が交差する風景が立ち上がります。本展では、藤野の作品を通して、日本画を平面の内部で完結するものとしてではなく、時間や空間と結びつく開かれた場として捉え直し、現代アートにおける日本画の新たな可能性を提示したいと考えています。



藤野裕美子《過日の同居》2022 年
撮影：木田光重

1988 年滋賀県生まれ。2011 年京都精華大学芸術学部造形学科日本画専攻卒業。2013 年同大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。2012 年にはフランスでのアーティスト・イン・レジデンスに参加。現在は滋賀県東近江市の共同アトリエ「Soil」を拠点に制作を続けている。近年の個展に「とぎれる／つづける」（ギャラリー恵風、京都、2023 年）、「つらなる地点」（2kw gallery、滋賀、2023 年）などがある。また、瀬戸内国際芸術祭（2022 年、2025 年）をはじめ、土地やそこに住む人の歴史に向き合うプロジェクトにも積極的に参加している。

お断り：2026 年度の展覧会は、京都市の予算が成立することを前提としているため、展覧会に係る予算が成立しない場合は、開催を見送ります。また、社会情勢によっては、会期等が変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

広報お問い合わせ 京都市京セラ美術館 広報 西谷・川口・野添

TEL: 075-275-4271 E-mail: pr@kyoto-museum.jp

※広報事務局の記載がある展覧会についてのお問い合わせは、各広報事務局までお願いします

その他の主な展覧会

大どろぼうの家

2026 年 4 月 11 日（土）～6 月 14 日（日）

本館 北回廊 2F

主催：関西テレビ放送、京都新聞、京都市

問い合わせ：広報事務局（ネネラコ内）06-6225-7885

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2026

2026 年 4 月 18 日（土）～5 月 17 日（日）

本館 南回廊 2F

主催：一般社団法人 KYOTOGRAPHIE

問い合わせ：KYOTOGRAPHIE プレス 075-708-7108 press@kyotographie.jp

テート美術館 — YBA & BEYOND 世界を変えた 90s 英国アート

2026 年 6 月 3 日（水）～9 月 6 日（日）

新館 東山キューブ

主催：テート美術館、ソニー・ミュージックエンタテインメント、ABC テレビ、キョードーエンタテインメント、京都新聞、FM802/FM COCOLO、京都市

問い合わせ：広報事務局（株式会社 TM オフィス内）ybabeyond@tm-office.co.jp

現代の染表現 1991～2025 — 染・清流展 25 回の軌跡 —

2026 年 7 月 7 日（火）～7 月 20 日（月・祝）

本館 北回廊 2F

主催：染・清流館、京都市

問い合わせ：染・清流館 075-255-5301

浮世絵スーパークリエイター 歌川国芳展

2026 年 7 月 18 日（土）～9 月 23 日（水・祝）

本館 北回廊 1F

主催：関西テレビ放送、産経新聞社、京都新聞、京都市

問い合わせ：広報事務局（ネネラコ内）06-6225-7885

禅とジブリ展

2026 年 10 月 3 日（土）～12 月 6 日（日）

新館 東山キューブ

スタジオジブリ企画制作 白隠展（仮）

2026 年 12 月 17 日（木）～2027 年 1 月 11 日（月・祝）

新館 東山キューブ